

コミュニティ・ベイスト・ツーリズムとしての  
ホームステイ事業  
—マレーシア・サバ州クダサン・シニシアン村の事例から—

Homestay Program as a Community-Based Tourism:  
A Case of Sinician Village of Kundasang, Sabah, Malaysia

江口 信清\*

要 旨

本稿の目的は、マレーシア・サバ州の一村落を取り上げ、村落コミュニティに根ざしたホーステイ事業の実態を解明し、これがホスト・ファミリーとコミュニティにどのような効果をもたらしているのか、ということ进行を明らかにすることである。さらに、ホスト・ファミリー宅に滞在した客の残した宿帳のメモを分析することで、客の側が何を、どのように評価したのかを理解することが第二の目的である。

シニシアン村の少なくとも2つのホスト・ファミリーの事例からは、ホームステイ事業を实践することを通じて高収入を得ることができると、女性の地位を引き上げ、プライドを強化する役割を發揮すること、就業機会を創出し、若者の流出に歯止めをかけること、ホームステイ事業を推進したい州政府の支援をうまく利用することによって道路、公会堂、公衆便所をはじめとする生活基盤を整備することができるようになったこと、などの著しい効果を見ることができると。生活基盤の整備に関しては、ホームステイ事業に直接係らない人にとっても利益になっている。

---

\*立命館大学文学部教授

しかしながら、ホームステイ事業に直接関与しない人たちがどのような人たちなのか、この人たちがホームステイ事業についてどう考えているのかについては分かっていない。多くの世帯がホームステイ事業への参加を要望しているとは言いが、この事業を含むグリーン・ツーリズムがコミュニティ・バイスト・ツーリズムであるとするなら、このあたりの事情を十分に解明することが今後の課題である

### Abstract

This article aims to analyze the present setting of the home-stay project based on the community-based tourism of a village in Sabah, Malaysia, and how this project has benefited some aspects of the host families and the community in which they live. In addition, this article examines the experiences of the guests at the houses of the host families by analyzing the notes taken by them. This fieldwork was carried out in the spring of 2011.

Some positive effects resulted from the home-stay project. First, families earned a relatively high income for participating in the project. Second, the project raised the status of females in the community and strengthened women's self-esteem. Third, the project created a work environment within the community and reduced outmigration by the males. Fourth, the village improved its infrastructure by building roads, a community hall, public toilets, street lights, and so on, through the state government's support. In fact, the improvement of the infrastructure proved beneficial also for those who did not participate in the project.

However, it is still unclear how the community members who did not participate perceived the project. It is possible that many households are willing to participate in the home-stay project. Thus, the next assignment

should examine the opinion of such people about the project.

**キーワード：**コミュニティ・ベースト・ツーリズム、ホームステイ、グリーン・ツーリズム、サバ州、マレーシア

**Key words :** community-based tourism, homestay, green tourism, Sabah, Malaysia

## 1. はじめに

### (1) マスツーリズムに代わるもう一つのツーリズムの出現

観光は安全、容易、快適を前提にした旅である。これを前提に多数が観光を实践できるように、道路、交通機関、宿泊施設、観光地などが整備され、そしてそれらの大半に係る旅行業も発達し、多数の人たちが同質的な旅をするマスツーリズムが今日まで支配的となってきた。しかしながら、そのような旅に飽き足らない人たちの目立った増加、自然環境との共生と持続可能な開発といった考え方が、1990年代になって目立ち始めた。これらの動きは、ポストモダンな状況とほぼ同じ時期に出てきた。近・現代を特徴づける絶対的価値観のゆらぎが、観光現象にも表出してきたのである。いわゆる名所旧跡といった観光地や名物のようなきまりきったものに対して重きを置くのではなく、これまで観光対象とみなされていなかった事物・現象に対して関心が払われるようになってきた。これまでの観光地やそこでの呼び物に飽き足らない人たちによって新たなものが発掘され（あるいは再発見され）、それなりに評価されてきたのである。

安全、容易、快適な生活や旅に慣れきった人たちの一部が、そうでない状態への憧れを抱き、珍奇な、「未開の」民族・文化、そして自然環境に対する再評価を始めた。この動きに「途上国」や日本の農山漁村の住民の一部が注目し始めたのである。これまでのマスツーリズムの対象となる観光地の多くでは外部の大資本が経営する宿泊施設、レストラン、そして関連施設が支

配的であり、現地の人たちの多くは観光から利益を得ることはなかった<sup>1)</sup>。それに対して、農山漁村地域で手持ちの資源を有効に使う、一部の住民だけでなく、コミュニティ全体が直接的・間接的に観光化に関わり、自分たちの生活環境や福祉の改善に結びつける試みも始まっている<sup>2)</sup>。コミュニティ内のホームステイ事業もその試みの一つである。

## (2) グリーン・ツーリズムとホームステイ事業<sup>3)</sup>

農山漁村地域で振興される主たる観光はグリーン・ツーリズム（ルーラル・ツーリズム、アグロツーリズムとほぼ同義）と称されてきた<sup>4)</sup>。これは日本では1992年6月に農林水産省が新政策として発表した「新しい食料・農業・農村政策の方向」で、新たな政策課題として取り上げられた。その後、グリーン・ツーリズムを振興するためにいくつかの施策が施行された。他方、アジア諸国では、1997年のアジア通貨危機に伴う農村問題の深刻化と、世界の貿易の自由化を目指す世界貿易機関（WTO）によるグローバル化の浸透を背景に、地域経営型グリーン・ツーリズム政策が推進され始めた（宮崎 2006：2）。とりわけ、東南アジアの観光大国マレーシアでは、それに先立つ1991年にアグロツーリズムが導入され、第八次マレーシア・プランにおいて採用された（ヤハヤ 2010：85）。日本でも、マレーシアでもグリーン・ツーリズムが、農山漁村の経済・社会的活性化の重要な装置として振興されることになったのである。日本やマレーシアを含む東南アジア・東アジアのグリーン・ツーリズム政策には2つの共通点が見られるという。それらは、「農村の内発的発展を目的に、従来の観光政策との差別化を図るために農業・農村体験を重視していること、受け入れ農村のなかに農民組織を形成して施設経営や推進組織の役割を担わせていること」（宮崎 2006：2）である。

さて、栗栖祐子は日本におけるグリーン・ツーリズム研究の動向を「農村研究分野」、「観光研究分野」、そして「林業経済研究分野」の3分野からレビューし、研究の不足している点や今後の課題をまとめている（栗栖

2011)。一つは、グリーン・ツーリズムが、コミュニティの個人や世帯に具体的にどのように影響を与えるかの詳細な研究だが、これは不足している。二つ目は、グリーン・ツーリズムを支援したり、運営する「中間支援組織」と「中間支援システム」に関する研究の在り方についての研究である。第三が、農家民宿に関する品質管理・向上のための仕組みに関する研究である。そして、四つ目が、地域活性化策としてグリーン・ツーリズムがどういった条件で機能するのかということに関する研究だが、栗栖はこの必要性について強調している。

他方、グリーン・ツーリズムであれ、別な形の「もう一つのツーリズム」であれ、マストツーリズムが実現できなかった地元民への利益の還元、それも直接に観光に関わらない人を含めてコミュニティ全体が利益を受けるような条件を創り出すことは可能なのだろうか。マストツーリズムに代わるもう一つの観光形態の中で、とりわけ貧困削減を目標にしたものがプロプアーツーリズムである。とりわけ、利益の一部がコミュニティ全体に再分配され、観光に直接関与しない人たちをも含む全体の福祉の向上や生活環境の改善を前提にしたものが、コミュニティ・ベイスト・ツーリズムである。プロプアーツーリズムの研究は緒に就いたばかりであるが、一つのコミュニティ全体がどのように利益を受けるのか、あるいはどういった条件が整えばコミュニティが生活環境や福祉の改善を実現でき、住民が幸せに感じるのかといった点についての詳細な研究はまだまだ少ないといわざるを得ない。栗栖も課題の一つとしてあげるように、グリーン・ツーリズムがコミュニティの個人や世帯に具体的にどのように影響を与えるのか、直接係る人とそうでない人の間にどのような違いがあるのかについての詳細な研究が必要である。「マレーシアや他の途上国では、農村観光はコミュニティ・ベースの観光 (community based tourism) に根ざしたものにほかならない」(ヤハヤ 2010: 84) のなら、まさにこのような研究は不可欠である。というのも、コミュニティが日常や非日常におけるコミュニティ全員全員の活動によって形作られ・維持さ

れてきたからに他ならない。直接に観光に関わらない人たちであっても、観光者が見聞きし、そして楽しみ、学ぶものの維持・管理に直接かかわってきたのである。

### (3) 本稿の目的と調査方法

本稿の目的は、村落コミュニティに根ざしたホーステイ事業の実態を解明し、これがホスト・ファミリーとコミュニティにどのような効果をもたらしているのか、ということをはっきりとすることである。さらに、ホスト・ファミリー宅に滞在した客の残した宿帳のメモを分析することで、客の側が何を、どのように評価したのかを理解することが第二の目的である。

今回、マレーシア・サバ州の事例を取り上げるが、筆者はマレーシアには2011年2月26日から3月6日の行程で訪れ、サバ州には2月28日から3月4日

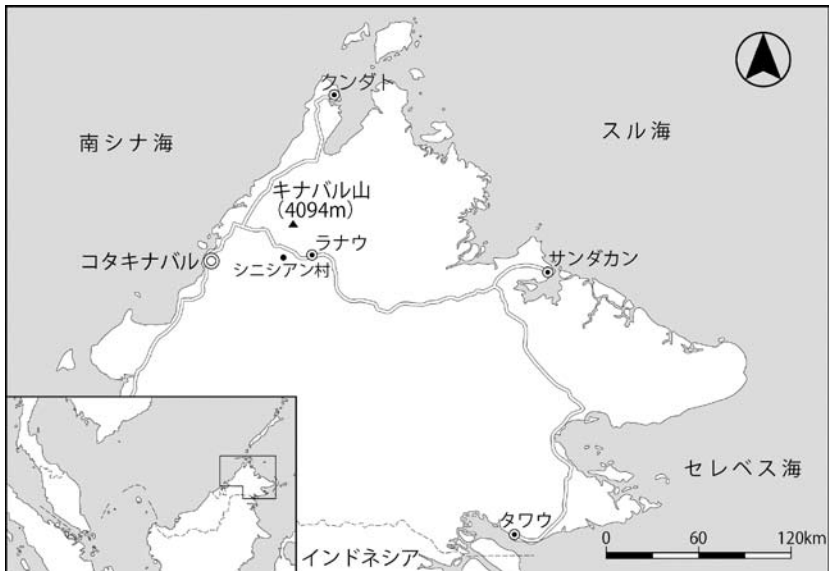


図1 サラワク州と調査村、シニシアン村 (雨森直也作図)

まで滞在した。近年マレーシアでは多くの州でホームステイ事業が実施されてきたが、今回の調査は、いくつかの事例の比較を通じて、マレーシアでのホームステイ事業の特徴と地域間での違いを抽出し、その背景にある諸要因を分析・考察する本調査の予備調査という位置付けで実施された。

## 2. マレーシア・サバ州とホームステイ事業

### (1) サバ州とエスニック・グループ

サバ州はマレーシア連邦13州の1つで、世界で3番目に大きな島ボルネオ島(インドネシアはカリマンタン島と称している)の北部に位置している(図1)。南に隣接するサラワク州とともに、東マレーシアと呼ばれている。州都はコタキナバルで、州の総人口は約300万人である。サバ州には38の先住民集団が共存しているが、その最大規模の集団がカダザン/ドゥスン人(Kazadan/Dusun)<sup>5)</sup>で、州総人口の30%ほどになる。この集団は文化的にかなり類似した下位集団からなっているものの、少なくとも10の異なった言語を有していて、伝統的には海岸平野と内陸部に住み、稲作を行ってきた。歴史的に、ドゥスン人の多くはキリスト教に改宗したものの、以前からの信仰を維持し続けている集団もある。また、近年、イスラム教に改宗した人たちももちろんいる(野村 1998)。また、これらの先住民に加えて、ボルネオ島の北東に南北に並ぶフィリピンの島々、とくにミンダナオからの移民労働者もコタキナバルやサンダカンには多く生活している。

### (2) サバ州観光とサバ・ホームステイ協会

#### 1) 製材業に代わる観光業とホームステイ事業

サバ州では最近までの数十年間主たる産業だった製材業が衰退し始めると、州政府は産業の多様化を模索し始めた。観光は外貨獲得を可能にし、さまざまな仕事を生み出す能力を有しているとして、政府が目し始めたのである。

その結果、観光産業が1980年代半ば以降徐々に成長し、とくに1990年代に官民ともにこの産業の育成に本格的に力を入れ始めた。1996年には『サバ観光総合基本計画』が策定され、サバにおける観光資源としての自然環境の重要性、および多数のエスニック・グループの歴史、考古学的遺跡を含む文化が高く評価された。観光振興と自然保護ならびにコミュニティ開発という点が開発議題の重要な部分をなしていた (Regis and Malangking 2000)。同じ1996年11月には、マレーシア観光省が音頭をとり、観光開発・環境・科学技術省がコーディネートする新たな事業、ホームステイ事業が地方のコミュニティ開発の重要な手段として着手されることになった (Kitingan 2000)<sup>6)</sup>。この事業の目的は3点ある。

- ・地方のコミュニティが観光産業に関与する機会を与えること。
- ・たとえば都市住民は地方の人たちの間で暮らし、地方の、本当のコミュニティを味わってみることに大変熱心だが、観光者の新たな、変化する需要や好みを満たすこと。
- ・地方のコミュニティと文化の交換をすること。

このような目的を果たし、コミュニティがうまく事業を進めるためには、コーディネーターを持つ必要がある。コーディネーターの役割は3点ある。

- ・関与するすべての参加者をコーディネートすること。
- ・観光者、ツアー代理店、そして直接に関連する組織体と交渉すること。
- ・事業を推進し、小冊子や貿易使節団を通じてそれを販売すること (Kitingan 2000 : 522)。

コーディネーターを探し、育成する事業も進められ、観光資源の発掘と評価する作業も精力的に進められていった。

## 2) 多様な観光資源と観光者数

サバ州には東南アジア最高峰のキナバル山 (4094m) がそびえている。この山を含むキナバル公園は2000年12月にマレーシア最初の世界自然遺産に登



録された。花崗岩の断層を剥き出しにした山の上部は、雲に覆われていることが多い。キナバル公園では、ガイドつきのトレイルウォークが実施され、周辺の豊かな植物相が紹介されたりもする。また、山中には3ヶ所に宿泊施設が設けられており、登山に先立って宿泊の予約をしておくことになっている。また、キナバル公園にはポーリン温泉があるし、世界最大の花として知られるラフレシアも自生している。

州周辺の島々には海亀が産卵に訪れるし、森林地帯にはオランウータンが生息している。海でのダイビング、森や山のトレッキングなどを含み、サバ州は格好の観光地として機能してきた。自然が多分に残っているサバ州への訪問者数は増加傾向を示してきた。2009年には総計1,683,924人が訪れているが、外国人訪問者数はそのうち562,144人である。これが2010年には、総計2,504,669人で、そのうち外国人訪問者数は795,953人となっている（Sabah Tourism Board 2011）。2010年のマレーシアを訪れた観光者数が約2460万人であることから、その約10%がサバ州を訪れたことになる。

### 3) サバ・ホームステイ協会<sup>7)</sup>

サバ州でのホームステイ事業はマレーシア観光省主導で2000年に始められたが、年々、これへ参加する村落・世帯は増加傾向にある。2011年3月現在、サバ州には10地区（District）の17村落、総計209世帯がホームステイ事業に参加している。これらを束ねるのが、サバ・ホームステイ協会である。この組織は、会長、副会長、秘書、秘書補佐、会計、会計補佐、そして6名の委員からなる委員会構成されている。2009年には10地区16村落のホスト・ファミリー宅にマレーシア人7,277人、外国人6,941人の総計14,218人が滞在した。そして、総額2,130,305.32RMを支払っている。さらに、2010年には、マレーシア人12,052人、外国人5,505人の合計17,557人が滞在し、総額2,464,995.1RMを支払っている。前年に比べて外国人観光者は若干減少しているものの、マレーシア人観光者が増加しており、全体としては23%の増加

ということになる。とくに、10月から1月にかけての時期に観光者が集中する傾向にある。

1 ホスト・ファミリーあたり最大3部屋まで客室を設けることが出来るが、2011年3月現在で総計432部屋が設けられている。1部屋にいくつのベッドを設置するかは、各ホスト・ファミリーに任されている。

サバ州ホームステイ協会は、ホームステイ事業にマレーシア人・外国人観光者を積極的に誘致するために、2011年には表1のような行事を開催した。

表1 ホームステイの行事暦(2011)

番号	事業の名前/行事	開催場所	開催日	目標外国人数
1	The Ocean Rhythm Festival	Misompuru Homestay, Kudat	2011年8月6-8	300人
2	Handycraft Carnival	Taginambur Homestay, Kota Belud	2011年9月29-30	200人
3	The CAN Holiday Products Festival	Melangkap Homestay, Kota Belud	2011年4月3-4	200人
4	Mountain Festival	Tanak Nabal Homestay, Kg. LobongLobong Kota Belud	2011年7月29-31	200人
5	Kaamatan Homestay Carnival	Misompuru Homestay, Kudat	2011年5月7-8	200人
6	World Mountain Music Festival	Walai Tokou Homestay, Kundasang Ranau	2011年10月7-9	300人
7	Traditional Sports Carnival	Penampang Village Homestay, Penampang	2011年11月26-27	300人
8	Food Carnival	Koposizon Homestay, Papar	2011年6月6-7	200人
9	Carnival Hariraya Aidulfitri	Walai Tokou Homestay, Kundasang Ranau	2011年9月23-24	200人
10	Rainforest Festival	Tambunan Village Homestay, Tambunan	2011年12月3-5	300人
11	Mitabang Homestay Carnival	Mitabang Homestay, Kg. Tulung Mantob	2011年9月4	200人

出典：Sabah Homestay Association's Document 2011より。

### 3. サバ州ラナウ地区クンダサンのシニシアン村とホームステイ事業

#### (1) シニシアン村の概況

筆者が調査したシニシアン村が属するラナウ (Ranau) 地区は14の小管区 (sub-division) からなり、それぞれの管区は複数の村から構成されている。クンダサン／ブンドゥ・トゥハン小管区は21の村落からなっている。その1つがシニシアン村 (Kampung Sinician) で、筆者はこのワライトコウ・ホームステイ (Walai Tokou Homestay) でホームステイを体験した。シニシアン村はこの付近の中心地、ラナウから13km北、そして州都のコタキナバルから98km東に位置している。この村を通り、コタキナバルとサンダカンに至る幹線道路は1979年～1990年に完成した。それまでは、ここからコタキナバルまで車で1日かかったが、現在は2時間程度である。住民の大多数はドゥスン人である。居住地域の広さは約26haで農地は317haに及ぶ。

2005年2月時点での人口総数は768人だが、男性が296人、女性が472人であり、明らかに性比率に差がある。とくに10代後半から30代までの男性が少なく、コタキナバル、そしてマレー半島部での就業や学校への流出がうかがえる (表2・図2)。13歳から39歳までの年齢層では女性が多いが、道路脇の野菜の店舗などの経営のほとんどが女性によって行われていることがこれから推察できる (写真1)。

村自体は1950年に開かれるはずだったが、強い落雷を受けていったん断念され、1952年に開村された。1977年には、自治組織である村落開発治安委員会 (JKKK) が発足し、1999年にはビジョン運動努力 (*Gerakan Daya Wawasan: Vision Movement and Effort*) 村 (Village) として認定され、村にビジョン運動努力 (Vision Movement and Effort) センターが設置された。

シニシアン村の西には花崗岩質からなるキナバル山が聳えており、山麓には牧場もあり、いわゆる亜熱帯の雰囲気はここではあまり感じられない (写真2)。高度も標高1200m近くあり、夜はもちろんのこと、昼間でもうすら



写真1 クンダサンの幹線道路沿いの店 (2011年3月1日筆者撮影)

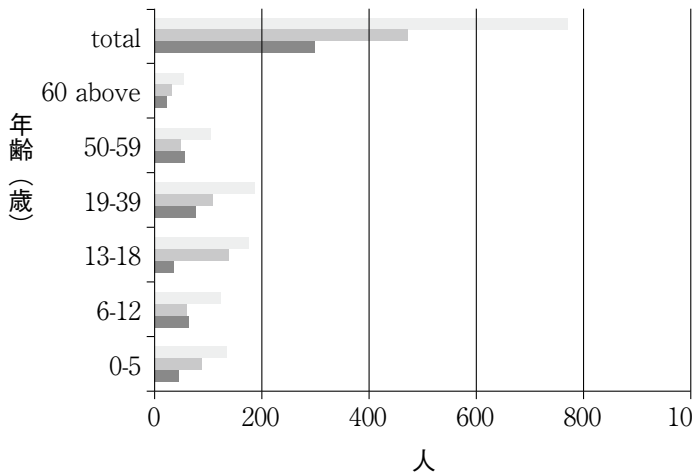


図2 シニシアン村の人口構成図 (2005)

出典) Walai Tokou Homestay Association のコーディネーター提供の資料による。

表2 シンシアン村の人口構成（2005）（単位：人）

性\年齢(歳)	0-5	6-12	13-18	19-39	40-59	60以上	合計
男	44	63	36	76	56	21	296人
女	88	58	138	109	47	32	472人
合計	132	121	174	185	103	53	768人

出典) Walai Tokou Homestay Association のコーディネーター提供の資料による。



写真2 キナバル山の遠景（2011年3月2日 筆者撮影）

寒い。

このような自然条件のために、周辺では野菜栽培が広く行われている。人口の約70%が農業を営み、残りはだいたい公務員であるという。クンダサン内の土地はドゥスン人によって所有されており、華人には土地を売らないし、貸もしないという<sup>8)</sup>。

サバ州政府は、0.5ha以上の畑を経営する人たち対象に、ハウス建設用に2万RMを補助するという。この制度は2004年から実施されている。収穫された作物の多くは道路沿いに出された多数の店で販売されている。クンダサンでは1984年にクンダサン野菜売店経営者協会（Kundasang Vegetables

Stall Operators Association) が農民の間で結成され、今日のような店舗営業についての規約などが決められた。店舗の規模は10×10mの広さに決められている。店を出す人たちは、店の裏に家屋を構えて生活している。村が州都のコタキナバルと州第2の都市サンダカンを結ぶ幹線道路上に位置していることもあり、両都市間を往来する人たちが野菜（キャベツ、トマト、キュウリ、シイタケ、インゲンなど）や果物（パパイヤ、マンゴーなど）を購入していくという。そのために、道沿いの店は朝の6時から夜11時頃まで開かれている。ここ出身の女性が店を経営し、彼女たちの夫は農業か公務員をしているという<sup>9)</sup>。

シニシアン村を含むこの地域の最大の問題点は、12月から3月にかけての雨季に、舗装していない道路が滑りやすくなり、山崩れが生じることもあるということだ。したがって、ここでは植樹をして、これを防ぐ必要性が強く感じられている。3月から8月までの風が強く吹く季節には、電気が3、4時間しか通じず、停電してしまうこともある。

## (2) シニシアン村のワライトコウ・ホームステイ事業

ドゥスン語で「ワライトコウ」(Walai Tokou) は「私たちの家」を意味する。ホスト・ファミリー宅に泊まると、自分の家にいるかのような雰囲気を感じることが出来るように、との願いがこめられているという。ワライトコウ・ホームステイ協同組合は2001年に正式に発足した。

シニシアン村にはホスト・ファミリーの認定証を有する28の世帯と44部屋の客室がある。シニシアン村には2005年2月の時点で120世帯あるので、全体の23.3%がホームステイ事業に参加していることになる。村のホームステイ協同組合には参加申し込み中の世帯がまだ数十世帯あり、参加希望者は増える傾向にあるということだ。なぜ多くの人が事業への参加を希望するのか、理由は明らかだ。それは先行する事業参加者が成功したのを見ているからだ、という。

事業参加希望者は、観光省がサバで主催するホームステイ事業の数週間のコースと衛生コースを受講する。そして、観光省の役人が個々の世帯を訪ね、部屋や便所の状態などを検査する。それで合格した人はホスト・ファミリーとしての資格を申請し、最終的に国から許可証が届くことになる。この事業の参加者の屋敷地や家屋の入り口には、許可証が掲げられている（写真3）。



写真3 ホームステイ・ファミリーであることを表示  
(2011年3月2日筆者撮影)

### （3）組合員と経済的恩恵

組合員になる場合、サバ州のホームステイ協会の株を購入する。1株300RMで、最大5株まで購入できる。協会はこれを資金の一部として、州政府所有のホテルのレストラン等に投資している。収益の一部は持ち株数によって、組合員に配当金として支払われる。

組合員は、部屋数によってコミュニティのホームステイ組合に組合費を毎月払う。組合員はホームステイ用に最大3部屋まで供することが出来るが、

部屋数によって1部屋10RMで、最大3部屋で30RMを組合に支払う。組合はこれらを基金の一部として、会員が病気のために入院したり、あるいは火事が生じた場合に、基金から見舞金として会員家族に給付される。また、会員の子どもが大学へ進学する際には、奨学金5,000RMが与えられる。むろん、これは返す必要がない。また、組合が主催する祭りの際の飲食物を購入する費用にも当てられる。組合員が家を修理したりする際には費用の一部を組合から借りたりもする。あるいは、農業収入が少なく、観光者が少ないときにも組合は金を組合員に貸す。借りる場合は、年間2%の利子があるが、最長5年間、最大2万RMまで借りることができる。誰でもが最大額まで借りられるかといえば、そうではなく、借り手の収入額によって決められる。地元の人たちは、互いにどれほどの収入を得ているのか知っているのだから、これはそう難しいことではない。

ホームステイは基本的には1泊2食、周辺のガイド付きで宿泊客は90RMを支払う。このうち30% (27RM) を地元のホームステイ組合が取り、残り70% (63RM) をホスト・ファミリーが手にする<sup>10)</sup>。

#### (4) ホームステイ協同組合

##### 1) ホームステイ協同組合の役員

組合長は政治とは必ずしも関係がなく、地元の農業とホームステイになんらかの形で関わっている人や自営業をしている人から2年毎に選出される。再選は可能である。現在(2011年3月時点)の組合長は任期4年目である。組合が振り出す小切手には、組合長だけでなく、3人の署名が必要である。

他方、ホームステイ事業でコーディネーターは極めて重要な役割を演じる。コーディネーターは、事業をコーディネートし、観光者、ツアー代理店、そして直接に関連する組織体と交渉し、調整する。そして、事業を推進し、小冊子や貿易使節団を通じてホームステイ事業を他国に「宣伝する」。組合員であり、クダサンを含むラナウ地区のコーディネーター役を務めるW氏は、



サバ・ホームステイ協会の副会計、かつマレーシア・ホームステイ協会の副会長でもあるが、組合が正式に発足する前年の2000年から無給で務めている。彼自身は伝統的なバンブー音楽を観光者に奏でる芸術家でもあり、次のような多様な仕事を手配する会社も運営している。

- ・ホームステイ事業のパッケージの手配。
- ・キナバル山登山のパッケージの手配。
- ・伝統音楽の演奏を学ぶパッケージの手配。
- ・バンブー・オーケストラ音楽と伝統舞踊の演奏。
- ・伝統的スポーツ。
- ・伝統食の調理の仕方と学ぶ、あるいはベジタリアン用の食事の調理の仕方を教える。
- ・テレビ／ビデオ・ドキュメンタリー・フィルムの手配。
- ・伝統的マッサージ。
- ・村祭り／コミュニティ作業。
- ・淡水魚釣り。
- ・交通。
- ・学生のパッケージの手配（マレーシア人と外国人向け）。
- ・植樹事業。

## 2) 組合が経営するレストラン

組合は村の中心部を貫通する幹線道路沿いに小さなレストランを経営している。コタキナバルとサンダカンを往来する人たちを含めて、飲食物を購入したり、ここで食事をする人たちで賑わっている。レストランでは8時間交代で、合計4名の若者が調理を含めて、24時間働いている。村をあげての行事が開催され、飲食物が必要な時には、レストランが食事の仕出しもする。すなわち、レストラン経営は4名の職を創り出しただけでなく、この地域で生産される農作物の一部も消費、村全体に貢献している。販売利益は組合の

会計に入り、組合員のために使われることになる(写真4、5)。



写真4 ホームステイ組合が経営する  
レストランの特別メニュー  
(2011年3月1日筆者撮影)



写真5 友人とレストランで談笑する  
コーディネーターのW氏(右)  
(2011年3月1日筆者撮影)

## 4. ジミー宅でのホームステイ

### (1) ジミーの世帯

ジミーはサバ州最大の先住民、ドゥスン人で、1958年生まれである。6人兄弟、4人姉妹の6人目だった。妻も同じ地域出身のドゥスン人で、ジミーが30歳のときに結婚したが、2007年に癌で亡くなった。ジミーの父は、ドゥスン人の多くがそうであるようにキリスト教徒だったが、イスラム教に改宗した。したがって、ジミーもイスラム教徒である。

ジミーには5人の子がおり、そのうちの2人は州都のコタキナバルで働いている。自宅には中学生人と高校生2人があるが、高校生の1人は2011年からサバ国立大学へ通い、スポーツ科学を勉強し、将来は体育の教師をめざすという。この娘がホームステイの客と一緒にディナーを調理する。

家屋は2階建てで、1階にジミーの家族が暮らしている。基本的には2階がホームステイ用に使用されている。2階には3つの寝室があり、そのうちの2部屋にはベッドが2つずつ、そして1部屋には二段ベッドが3つある。

したがって、一晚10人の客を泊めることができる。

## (2) ジミーの経済活動：収入と支出

ジミーは基本的には農民であり、5エーカーの農地を保有し、このうち3エーカーを使用している。現在の土地は父親の代から継承している。土地の権利はサバのブミプトラのみに認められる。もちろん、ブミプトラ以外でも借地することは可能だが、彼らに所有権は認められない。先住民のキリスト教徒もイスラム教徒もサバではブミプトラの範疇に入る。半島のマレー人もここではブミプトラであり、土地の購入も認められる。

ジミーは小型コンバインを所有しているが、基本的にはクワを主要な農具としている。ジミーの畑の周辺にはインドネシア人家族が4世帯家を構えているが、これはジミーが雇ったものだ。エーカーあたり肥料と農薬に300RMが必要である。畑ではキャベツ、レタス、トマト、キュウリ、ニンジン、カリフラワーなどの野菜類が栽培されている。地元の仲買人が訪れてジミーから農作物を買取り、コタキナバルまで持って行く。仲買人から支払われる販売代金から肥料・農薬費を引き、残りの二分の一をジミーがとる。残り二分の一を4人のインドネシア人が均等に分割する。インドネシア人を雇用しても一定額を彼らに支払うのでなく、このようにして販売額の一部を分配することで、働けば働くほど手にするものも多くなるという動機付けになっている、とジミーは考えている。インドネシア人はチムール出身で、ジミーが保証人として入管に登録している。

ジミーの農業収入はこのようにして、月に少ないときで500-700RM、そして多いときには3,000RMになることもある。ホームステイ事業で月平均800-900RMの収入があり、とくに年末には観光者が多く滞在するので、2,000-3,000RMの収入になることもある。農業収入とこれを併せたものが、ジミーの総収入である。

他方、支出については電気代が月80RM、ケーブルテレビが月80RM、水

道代は現在なし、子どもの昼飯代が2人で月120RM、世帯の食費が月450RM、ガス代が2ヶ月に1つのLPガスで28RM、車のガソリン代が月250RMほどいる。その他、衣料品購入やその他の雑費が必要だが、毎月貯金することができる。

### (3) ジミー宅でのホームステイ

ジミーは、ホームステイが観光者に人気があるということを知ったので、2002年に組合に参加した。これについては、州政府の観光局 (tourist board) の役人が参加を奨励したためでもある。ジミーに説明するために、ここで最初から事業に参加している人がやってきたが、別に不安を感じたことはなかった。彼はコタキナバルでの5、6日の養成コースに参加し、トイレ、家屋、寝室がホームステイの基準に達しているかどうかを調べられ、資格証明書を発行された。ホームステイ事業を実施するために特別な新しい部屋を増築することは認められないし、客用に特別なものをわざわざ作ってはいけないということである。外国人客には床に寝るのを好む人がいるが、マレーシア人の80パーセントはベッドを好むという。

現在、コタキナバルからサンダカンに通じる道路が大規模に改修中で、ジミーの家に引かれている水道が止められたままである。したがって、家で必要な水は他所から運ばれている。唯一、これだけが問題で、まもなく解決するということである。

ジミーは、他の滞在者に対してと同じように、筆者を村の森へ連れていってくれた。森の道は整備され、道標が角角に立っていたが、組合員の手によるものだった。森では、たとえば籐を切って、その汁を傷口につけると治るなどの民俗知識も披露された。森はまさに民俗科学の宝庫である。

## 5. サティナ宅のホームステイ

### (1) サティナの世帯

サティナは46歳で、電話会社勤務の52歳の夫、リゾートで勤務する24歳の長男、専門学校を卒業する18歳の娘、中学生の14歳の娘、そして5歳の幼稚園児の息子と暮らしている。2階建ての家で、家族は1階に住み、以前は2階を他人に貸していた。2001年に借り手が家を出たので、ホームステイ用に使うことにした。

夫の電話会社からの給料は月2,000RMで、サティナが主として行っているホーステイ事業からは2,000RMほどの収入がある。この合計4,000RMが毎月の収入である。それに対して、電気代に150RM、水道代が10RM、ガス代に14RM、ケーブルテレビに40RM、食費に350RMほど、3人の教育費に400RM、雑費に20RM、組合費に30RMほどを毎月支出する。支出の合計は1,014RMとなるが、夫が車を所有しているので、ガソリン代などの支出もある。そして、貯金もしている。

家では自家消費用にキュウリ、ネギ、レモン、セリ、キャベツなどをサティナが作っている。もちろん、これは売らない。

### (2) サティナ宅でのホームステイ

ホームステイする人達用の2階には3寝室、ダイニング・キッチンと居間、そしてバスルームがある。各寝室には2組のシングルベッドが備え付けられている。ベランダは広く、ここから西の真正面にキナバル山が聳えている。コタキナバルで専門学校に通う娘とコタキナバル近くのリゾートで働く息子も近い将来はホームステイ事業に参加したいと考えている。そのために、現在、敷地内にかれらの家を建設中である。2階の入り口と居間には、ホームステイの空間内では飲酒は厳禁である、との文言を記した紙が張られている(写真6)。シニシアンでホームステイ・ファミリーをしている人たちのほと

んどはイスラム教徒である。この人たちの多くはキリスト教から改宗したが、イスラムの教えに従って、アルコール類を飲まない。葬式などもイスラム教のやりかたで行う。しかし、宗教の違いにもかかわらず、イスラム教徒もキリスト教徒も仲良く暮らしている<sup>11)</sup>。

サティナは多くの妹・弟がいる貧しい家庭の長女だったので、高校は1年までしか行けなかった。余裕ができた後年、高校を卒業することができた。ドゥスン人の中では、長年、女は教育を受ける必要がないと考えられていた。彼女は2001年にホームステイ組合に参加した。参加の動機は、すでにやっている人から収入が良く、需要が高いと聞かされたからである。これまで彼女はホームステイ事業を自分の力だけでやってきたが、経済力と自信がつき、夫を経済的に支えている。自分で経営できてきたことがたいへんうれしいという。ただ、子どもを養い、家事をこなし、ゲストの相手をするために、時間をやり繰りしなければならないことがたいへんだった。予約した客が来ないこともあった。今は、神に感謝している。

とくにサティナは2010年から組合長に就任してきた。組合長の仕事の一つは、予約が入ると組合員にゲストを振り分けることである。客の人数にもよ



写真6 居間にある禁酒を記した貼紙 (2011年3月2日筆者撮影)

るが、できるだけ満遍なく配分する必要がある。その他、州政府の代表がしばしば訪ねてくるつど、彼女は彼らと村の公会堂で会議をする。公会堂は州政府が建てたである。

ホームステイは一般的にはパッケージで売られている。ゲストとホスト・ファミリーを仲介する旅行者に、客が何が見たいのか、どのような経験をしたのか予め尋ねておく。それ次第だが、文化ショーを見せたり、畑へ連れて行って、作物の作り方を教えたりもする。パッケージの内容によって値段が決まる。文化ショーでの踊り手や演奏者は組合員で、パッケージで文化ショーの値段を決め、踊り手や演奏者に客の支払い額の70%を、そして残りの30%が組合に配分される。

組合員・非組合員を含む村の人間関係も良好だが、組合員は経済的にも豊かである。

## 6. ジミー宅に残された宿帳に見るゲストの体験

ジミー宅にある2010年3月14日-2011年2月21日の宿帳に残されたゲストの資料の実態と、その分析を僅かながら試みてみよう。このほぼ1年足らずの期間に633人が名前、住所、署名を記し、そのうちの一部の人が備考欄にメモを残している。もちろん、これが滞在者の全員ではない。滞在者が親子連れのような場合、代表者のみがメモを残すことも多いからだ。たとえ親子連れでなくとも、わざわざ記帳するような面倒を避ける人もいる。したがって、ここでは数は問題にしない。どのような属性を有する人が、どのようなコメントを残しているのか、それはなぜかだけを考えてみることにする。

マレー語、英語のコメントに共通している点の1つはホームステイ先のホスト・ファミリー自体を評価したものはないのではないかとこの点だ。おそらくキナバル山を西にいただき、比較的涼しい村自体の位置が高い評価につながっているのではないかと考えられる。ペナン島のテロツ・バハンのホー

ムステイ先に残されたゲストのコメントには、ホスト・ファミリーの料理やファミリーのその他の点について評したものが多かった<sup>12)</sup>。ジミー宅に残された英語でのコメントの上から5名は、ブルネイに駐留する、それぞれ異なった国の外交官（カナダ、ラオス、カンボジア、クウェート、サウジアラビア）である。彼らのコメントは社交辞令なのかもしれないということを考えると、ホームステイ先の経験そのものは滞在者の多くにとってはむしろ期待外れだったということをこれらのコメントが示唆しているのかもしれない。いずれにしても、コメントからは多くのことを語れない。

表3 ジミー宅のゲスト帳の備忘録にコメントを残した人数

コメントの言語	人数(人)
英語	34
マレー語	99
合計	133

表4 マレー語・英語でのコメント

マレー語でのコメント	人数	英語でのコメント	人数
おめでとう・ありがとう	39	すばらし・素敵な体験	1
よくやった	10	たいへん良い仕事	1
マレーシアは1つだ	5	素晴らしく、魅力的	1
たいへん良い	19	素晴らしく、見事な歓待	1
Walai Tokou が好き	1	たいへん素敵	1
素晴らしいところだ	1	素敵だ。歓迎式	1
サバは最高	1	意味不明	28
美しく、楽しめる	1	合計	34
マレーシアは本当にアジアだ	4		
すてきな村だ	2		
よい仕事だ。続けてね	2		
たいへん幸せだ	3		
頑張って	8		
誇りに思え	1		
保存力のある文化だ	1		
落ち着いた所	1		
合計	99		



## 8. 小括

2008年のマレーシアの世帯当たりの平均所得は20,795ドルである（みずほレポート 2010年6月9日）。少なくともシニシアン村の2つの事例からは、この平均所得には及ばないにしても、ホームステイ事業を実践することを通じて高収入を得ることができること、女性の地位を引き上げ、プライドを強化する役割を発揮すること、就業機会を創出し、若者の流出に歯止めをかけること、州政府の支援をうまく利用することによって道路、公会堂、公衆便所をはじめとする生活基盤を整備することができるようになったことなどの著しい効果を見ることができている。生活基盤の整備に関しては、ホームステイ事業に直接係らない人にとっても利益になるはずだ。ホームステイ事業への参加者は、この事業に全面的に依存するのではなく、農業やその他の収入が世帯にあり、何らかの事情で観光者の来訪が不安定になっても、経済的にはそれなりにやっていける。

今回の調査で明らかになりつつあることは、リーダーシップとホームステイ事業の関係である。ラナウ地区には温泉のある村があり、ここでもホームステイ事業が開始されたものの、不発に終わったとのことである。その最大の理由はリーダーの問題であるようだ。村落全体のことを考えずに、個別の利益しか考慮しなかった結果であるという。それに対して、シニシアン村のホームステイ事業でリーダーの役割を果たしてきたコーディネーターは村民から高い評価を受けている。リーダーシップの点に関して調査することは今後の課題の一つである。また、ホームステイ事業に直接関与しない人たちがどのような人たちなのか、この人たちがホームステイ事業に対して何を考えているのかについては分からない。多くの世帯がホームステイ事業への参加を要望しているとは言うが、この事業を含むグリーン・ツーリズムがコミュニティ・ベイスト・ツーリズムであるとするなら、このあたりの事情を十分に解明することも今後の課題であることは言うまでもない。

## 注

- 1) マスツーリズムは、自分で観光の準備をあまりしたくないか、できない人たちのために企業がすべてを準備してくれる他律的なものである。
- 2) よく知られている例は京都府南丹市美山町北集落の事例である(宮崎 2005他)。ここでは集落の全戸48戸が出資して、有限会社を設立し、コミュニティがグリーンツーリズムを推進してきたことで知られている。
- 3) 日本では「ホームステイ」(homestay)という語は定着しているといっても過言ではないが、「ホームステイ」という語は英語の home-stay の訳で、日本では1980年代より一般化し、英語圏では2004年に *The Oxford English Dictionary* で新出単語としてはじめて採択されたという。しかし、「ホームステイ」が実践されたのはずっと以前の1934年のことで、アメリカ合衆国の一民間人 Donald Beates Watt が、自国の十代の学生をドイツとオーストリアへ連れて行き、文化体験をさせたのが最初であるという(山口 2008: 31)。「ホームステイ」はあえて日本語に訳せば、「民宿」あるいは「民泊」であり、泊めるものか、泊るものかという主体によって呼び方は変わる。ホームステイという英語が日本語として用いられるようになるまでに、現金を介するかどうかは個々の場合で異なっただろうが、ホテルや旅館に泊まらず、都市・農山漁村の一般家庭に泊めてもらう、あるいは泊るという宿泊形態は日本には存在していた。あるいは外国でも報酬を要求せずに旅人である異人を宿泊させるといった慣習は昔からあったことが知られている(赤坂 1992: 89; 江口 1990: 40; 他)。
- 4) 霜浦森平によれば、「グリーン・ツーリズムを4つの領域(1 農家経営・農村経済の多角化、2 農村社会の再編・再生、3 農村の自然環境の保全、4 農村・都市における人的交流の推進)に貢献しうる取り組み」(霜浦 2011: 71)であるという。
- 5) 19世紀に北ボルネオにやってきた北ボルネオ特許会社のイギリス人が、平地で水田稲作を行っていた人々をドゥスン(農園の民)人と称した。しかし、この語が「田舎者」といった差別的な響きを有していたために、1950年代にコタキナバル南郊のピナンバン地区に住むドゥスン人が自分たちの民族名として「都会人」を意味するカダザン人を自称し始めた。したがって、ドゥスン人を名乗るか、カザダン人を名乗るかは、各個人の好みの問題とされているという(野村 1998: 250-251)。
- 6) ヤハヤによれば、マレーシア最初のホームステイ・プログラムは、1995年パハン州のトゥムロー(Temerloh)で立ち上げられたものだという(ヤハヤ 2010: 89)。
- 7) サバのホームステイに関する詳細とシニシアン人のホームステイ事業に関する資料は、ラナウ地区コーディネーターで、かつマレーシア・ホームステイ協会副会長 Kohadie Watiman 氏から提供されたものであり、公刊された報告書のようなものではない。
- 8) 1980年の時点で、サバ州には中国系住民が155,304人(総人口の約16.2%)いた。コタキナバルには41,842人(市総人口の約4.3%)、そしてラナウ地区には624人(この地区総人口28,047人の2.2%)を占めていた(野村 1998: 248)。
- 9) これらの情報は3)と同様、Kohadie Watiman 氏や数人の村人から与えられたもの

である。

- 10) JKKKはクンダサンの5村落(ベレンペラン、ランバ、ランバラマイ、ジンタマタ、シニシアン)すべてにある。そして、5村落の人口は総計5,000人ほどである。JKKKのほかには、農業協同組合がある。サバ州の主要政党はUMNOであり、村落は豊かで、ホームステイ事業の収入の一部がJKKKに配分されることはないという(Kohadie Watiman氏による)。それに対して、ペナンの主要政党はUMNOではないために、JKKKは相対的に貧しく、ホームステイ事業の収入の一部がJKKKに配分されることになるのかもしれないという(Kohadie Watiman氏による)。
- 11) マレーシア憲法第160条には、マレー人の定義が提示されている(Nazaruddin, Asnarulkhadi, and Ismail 2006)。
  - 1 イスラム教徒であるもの、
  - 2 マレー語を日常語として使用しているもの、
  - 3 マレーの風俗習慣に従って生活しているもの、
  - 4 マレーシアもしくはシンガポール独立以前にこれらの地域で生まれているものか、その子孫。この4つの条件のいずれかを満たしているものであれば、ブミプトラとして認定される。そうすると、就職、福利厚生、年金などが非ブミプトラと比べて、かなり有利になる。1970年以來のこのような政策を背景に、イスラム教徒への改宗を図ってきたものが多いのかもしれない。
- 12) ペナン島のテロツ・バハンのホスト・ファミリー宅に2008年8月1日から2009年9月6日までの78件のゲストのコメントが残されていた。このコメントに関しては、拙稿(2010)ではまだ分析されていない。これを次稿では取り上げてみたい。

## 謝辞

本資料の収集にあたり、マレーシア・プトラ大学林学部のバクリアザド・ビン・ハッサン・ザキ講師はサバ州での4泊5日の全行程を案内し、通訳なども務めてくださった。シニシアン村では、ホームステイ事業を実施しているジミー・ワティマンさんと娘のララ・ワティマンさん宅、そしてサティナさん宅にそれぞれ1泊2日したが、森のトレッキングや情報提供を始め、ドゥスン族の文化や村落のことなども気軽に教えてくださった。また、マレーシア・ホームステイ事業の副会長で、ラナウ地区のコーディネーターをしているコアディエ・ワティマンさんからも貴重な資料の提供を受けた。その他、多くの人たちにも親切に対応していただいた。ここに記して感謝の意を評する。本資料収集の調査は「2010年度立命館大学研究強化費」を受けて実施されたことを記しておく。

## 参考文献

- Butler, R. (1990) 'Alternative Tourism: Pious Hope or Trojan Horse', *Journal of Travel Research* 28(3) : 40-45.
- Kitingan, Nelson (2000) 'Tourism Development in Tambunan: A Case Study on the Development of Tambunan Village Resort Center', In *Borneo 2000*, Michael Leigh,

- (ed.). Kuching, Sarawak: Institute of East Asian Studies, Universiti Malaysia Sarawak, 519-522.
- Nazaruddin, Hj. Mohd Jali Ma'rof Redzuan, Asnarulkhadi, Abu Samah, and Ismail Hj. Mohd Rashi (2006) *Malaysian Studies: Nationhood and Citizenship*. Petaling Jaya: Prentice Hall.
- Regis, Patricia and Mary Malangking (2000) 'An Overview of Tourism in Sabah Promoting Culture and Environmental Preservation in Sabah, 1990-2000, In *Borneo 2000*, Michael Leigh, (ed.), Kuching, Sarawak: Institute of East Asian Studies, Universiti Malaysia Sarawak, 505-518.
- 赤坂憲雄 (1992) 『異人論序説』 筑摩書房.
- 江口信清 (2010) 「マレーシアのホームステイ・プログラムとツーリズム—ペナン島テロップ・バハンのホームステイの場合—」『立命館大学人文科学研究所紀要』 95 : 113-130.
- 江口信清 (1998) 『カリブ海地域農民社会の研究』 八千代出版社.
- 栗栖祐子 (2011) 「日本のグリーン・ツーリズム研究の動向と今後の方向性：農村 観光 林業経済の研究レビューから」『林業経済研究』 57(1) : 37-48.
- 宮崎 猛 (2006) 『日本とアジアの農業・農村とグリーン・ツーリズム』 昭和堂.
- 野村 亨 (1998) 「マレーシア多民族社会の中で—北ボルネオ(サバ州)の華人」可児弘明・鈴木正崇・国分良成・関根政美編『民族で読む中国』朝日新聞社、225-262.
- 霜浦森平 (2011) 「グリーン・ツーリズム研究」江口信清・藤巻正己編『観光研究レファレンスデータブック・日本編』ナカニシヤ出版、71-81.
- ヤハヤ・イブラヒム (2010) 「マレーシアの農村観光と島嶼観光—観光への住民の参加と観光のもたらす影響について—」『立命館大学人文科学研究所紀要』 95 : 73-112.
- 山口隆子 (2008) 「「ホームステイ」誕生の背景と求められた異文化理解—世界で最初のホームステイ組織・EIL を事例に—」『神戸文化人類学研究』 2 : 30-69.